

月新らしければ空は星のみなり、西の木戸を出ると松の林、虫の音をふみ、露をこるがして、南にめぐつて居る磯に出た、おぼるながら沙は白いけれど岩はくろい、漣よする大きなに倚つてさきの夢をおもふて見る。霧はからだをまいた。

この島を去つて、南の奈賀島をさつて、更に南、世古島の東に出ると正面に平群島の山、右手の遠に入島がかすむて、左に國の様な屋代島の紫、返り見ると大座山がかぶさるやうに翠をかざして汀には白浦といふ小湊がある。

ある夏のたそがれ、吾等の船は遠い國の東からめぐつてこの港についた、嵐おさまつて船のやるすべなくその宵はあそこに停ることゝした。船體は陸とはすになつて舳を沖にむけ油のやうな汐に浮むで居る、右舷の窓にのぞくと西の空は火をながしたかと思はるゝ朱赤丹紅、嘗て師の堂にて見し英國閨秀畫家のかきしといふヴィリジアンを含む夕雲北より南に棚引き、大座山の脈は奈賀島となり右より西にかたむき、雜木多い世古島はまともに藍褐蒼紫濃く、西に出てたる岬の緑あか

るき松、東にたちし巖のセピア冠りしニュー
トラルチント、大洋左に展けて緋の打紐の幾
流れ、平群に夕炊たく烟ほの見えて、ゆく舟か
へる舟みな歌に酔へる、平和の浦の靜かなる
かな。小舟に權とつて謳ふらく

あゝうつくしきひと時の

戀の如くに、海のいろ

戀のごとくに、島の幸

みどりの夏は

暮れむとす——

舟をまげせば、さつき僕が倚つて居た窓に弟
が出て、潮温い南洋の島から拾つて來た瑪瑙
色の貝の笛を吹いて歌に合して居る、折しも
羽根白き一羽の海鳥鷹揚に檣をまわつて天よ
り水に落ち、船のうしろに浮いた、八島の遠
はたそがれの幕しづかにたれ、空に一片の雲
もあられば水に一葉の舟もない、平和の浦の
寂かなるかな。

* * * * *

更に思ふ、彼れが眉目美しき貴族の伶人であ
つて、共に國を逃れ來し僕が戀人とさすらふ
のであつたならば、これ一篇の詩てまた一幅
の繪てはあるまいか。

かへつてすぐ泉に走りパレットを洗つて置か
うとおもふ。

船中であるう、左足の踵に一寸はひのぼつて
直ぐ下りた、水の様流るゝ曉のあらしにふ
かれてまた松の林をくゞり、「窓の灯の草にう
つりて虫の聲」する庭へ裏木戸よりかへる。

○ 秋 花

一本の柳に秋の夕日さして

古井のあたり蜻蛉むれとぶ

城守りが唄は小雨の音に和して

萬里の城は草只青き

○ 諸君のうちで三脚、水筒、寫生箱などの不用
な方があればお譲り下さい、古くても構いま
せん、相當の謝金は引替に差上ます（神奈川
縣厚木町山田方S、O、生）

秀逸圖案の彩色版として挿入せられたのは大
賛成、願くは技術を主とする繪端書の秀逸も
石版として出して下さい（大和の山人）

↓